

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第2号】
令和元年
5月20日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

☆令和元年度 教育指導センター基本方針☆

主体的・対話的で深い学びとは

御殿場市教育指導センター室長

高橋 正彦



◇新年度が始まって一か月余りがたちます。先生方は本当に多忙な毎日をごされたことと思います。子どもたちとの出会い、新しい学級の出発授業参観や家庭訪問、そして校務分掌の仕事。運動会の練習が始まっている学校もあります。学級づくりや授業の準備のためにかけられる教師の気力と時間の確保には厳しいものがあると思います。そんな中でも、「少しでも良い授業を」と目指してがんばられて

いる先生方に心から感謝いたします。
◇昨年度、教育指導センターでは、ブックレットNo.5として「主体的・対話的で深い学びを志向する授業」を作成しました。これには、市内の十一人の若い先生方の実践を取り上げています。この小冊子を作成す



過程では、実践した教師自身の分析、指導員の分析、授業者と指導員との話合い、指導員同士での検討などがありました。一時間の授業をじっくりと時間をかけ、様々な視点から検討することは、これまでなかなかできなかったことでした。

指導員同士の検討会では、活発な意見交換がなされました。私たち指導員自身も、「主体的・対話的で深い学び」とはどのような授業であったら良いのかを、繰り返し問われる場となりました。

◇さて、今年度の教育指導センターの活動についてです。
勝俣純所長以下、高橋正彦、岩田京子、湯山伸彦、芹澤ゆき子、鈴木貴子の五人の指導員と、土屋英次、豊福和夫、福田道治の三人の外部講師で活動

します。

また今年度は、特に三つのことに力を入れて指導していきます。一つ目は、事前指導の充実です。通常学級の訪問指導では、年に一回は事前指導を組み入れていくことにしました。事前に授業内容を検討することで、授業者と指導員が一緒になって授業づくりをしていきたいと思います。二つ目は、通常学級の訪問指導では、対象になる先生方に課題を決めていただき、その課題に沿った指導が年間を通してできるようにしたいと思います。三つ目は、特別支援学級数増加に伴う課題への対応です。学校教育課と連携しながら進めていきたいと思います。これらの三点を念頭に、「通常の訪問指導」、「幼稚園年長学級の訪問」、「若手・臨時講師研修会」、「学年主任等研修会」、「教育情報研修会」等の研究会、「夏の教育なんでも相談」、「ブックレットの発刊」に取り組んでいきます。

重点項目

- ①事前指導の充実
- ②課題設定に沿った年間指導
- ③特別支援教育への対応

寄り添った、
温かな支援
Aさんの就学支援を
通して
就学支援指導員
岩瀬和代

自閉傾向のAさんは、周りとのコミュニケーションをとることが苦手です。保護者は入学後のきめ細かい個別の支援を求め、支援学級への入級を決断しました。しかし、新しい環境に強い不安感を抱き、不登校の心配がありました。
子ども家庭センターの臨床心理士が窓口になり、入学前から保護者・園・学校・医療機関と市教育委員会とで、「情報共有」「学校見学」「就学相談」等、様々な形で、Aさんに適した就学先について検討を重ねてきました。どの子もかけがえのない存在であり、だからこそ、その子にとってより良い就学先を保護者が苦悩しながらも、模索されている姿を目の当たりにしてきました。
入学に向けて、学校や園は、Aさんの特性に応じて、丁寧な受け入れ態勢づくりや保護

**5月11日(土)に「幼保こ小中合同
研修会」が開催されました。**

静岡県義務教育課幼児期養育センターの嶋田成幸先生に御講演いただき、分科会で有意義な情報交換が行われました。この研修会の様子は次号で詳しく掲載します。

者との信頼関係づくりに努めてくださいました。特別支援コーディネーターを中心に親身になって保護者の相談にものってくださいました。

入学後3週間。支援学級に自分の居場所を見つけ、ゆつたりとした穏やかな時間と空間の中で、笑顔のAさんの姿がありました。全てを理解し、受け入れてもらっているという安心感さえ伝わってきます。「お陰様で、いい環境で小学校のスタートが切れました。」保護者の一言に、目頭が熱くなりました。

園・学校・関係機関の先生方の寄り添った、温かな支援・配慮の積み重ねが、子どもたちの自信と活力へ、そして、保護者の信頼へとつながっています。頭の下がる思いです。

教育センターだより

風薫る

幼児期から児童期へ学びをつなげる

指導員 芹澤 ゆき子



◇家庭から初めての集団

3歳児にとつては、これまで家族に守られていた生活から一変、集団生活に入ります。まだまだ自分中心の考え方で、また、家庭環境等の違いが集団生活をする上で影響し、個人差となつて表れます。

◇幼児期の特性や発達をふまえた3年間であと伸びする力を育てる

園では次のような姿を目指します。

自己発揮し、やってみようと好奇心を持ち、友達と楽しむと感じる3歳児。自分の思いを出し、友達とかかわる中で、自分と他者の違いに気づき友達よさを知り、一緒に活動を楽しむ4歳児。目的に向かって友達と相談したり力を合わせたりしながら協同的な活動を楽しむ5歳児。

5歳児は、園では一番上です。3歳児にカッパの着方や片付け方を教えるなどして頼もしい姿を見せてくれます。周囲から認められ、役に立つことで自信もつき、年長としての自覚が生まれます。この意欲を大切にたくさん体験を積み重ね、就学までに学びの基礎となる力をつけていきます。



◇園の学びを小学校で伸ばす

さて、その子どもたちを引き継いでいく小学校ですが、園で培ってきた学びを考慮したスタートをしてあげたい。様子を見ることができました。

例えば、給食が始まって間もないにもかかわらず、給食当番を行い、おかずやパンをしっかりと配っていました。任される喜びや新しいことができる楽しさを感じているのでしよう。給食着に替えるのも早く、やる気満々でした。他の子どもも整然と並んでトレーを持ち、給食を机に運んでいました。

また、全校集会にも早くから参加し、校長先生に褒められるたびに、より聞く姿勢がよくなり「1年生だつて頑張れるよ」と誇らしげな顔をしていました。2年生の負けまいとする姿や、他の学年も見本になろうとする思いが見られ、学校全体の活気が伝わってきました。

これまでの、「1年生は、一番小さいからまだいろいろなこと知らないしできないから仕方ないね」というような考えから、「やってみようかな」「知っているんだね」「できるんだ」「すごいね」に変わり、1年生のやる気スイッチを押す先生の声が、子どもたちの主体的な姿を引き出していました。それと同じに、先生方は学校生活を送る上で約束事を、きちんと繰り返し返

してくれていました。



園でも約束事があり、早いうちに学校のルールを知った方が子どもたちもスムーズに動けるものです。

先生たちが園での学びをつないでくれることで、子どもたちの自覚と自信が強くなっていました。

瀬戸亮策先生が毎月出してくださっている「ようちえんハイ」という便りに、原里小学校の先生方が幼稚園の先生から幼児の手遊びなどを楽しくに教わっている一コマが掲載されていました。このように、小学校と園で一緒にやっていけることはきつとまだまだたくさんあると思います。

園と学校の互いの理解が、子ども理解につながり、それが個々の確かな学びにつながっていくのだと考えます。

子どもは先生の目の奥の心を感じ取っています。「先生、大好きだよ…」の声が聞こえますか。